

観光研究のアフェクト（情動）論的転回
——「感情ネクサス」の生成変化について——

The Affective Turn of Tourism Studies
—— Becoming of the Nexus of *affectus*

橋本 和也*

Abstract

Recently in tourism studies we have seen the transition from the performative turn to the mobility turn, and to the ontological turn. These turns prompted a great progress to tourism studies, but now we have to face up to the affective turn. It is a common saying that the tourism industry depends on emotional labor, but there is no explication how to generate these emotions, nor to affect and be affected. Affect is not only theorized in terms of the human body, but “also theorized in relation to the technologies that are allowing us both to see affect and to produce affective bodily capacities beyond the body’s organic-physiological constraints” (Clough 2007:2). To clarify the “relationship of *affectus*” where human and nonhuman actors in a hybrid-network affect each other and are affected, we have to read B. Spinoza’s “*Ethica*” carefully and observe the emerging process — or becoming — of “the Nexus of *affectus*”.

* 京都文教大学 名誉教授

キーワード：観光研究、アフェクト論的転回、アフェクト／アフェクトゥス、スピノザ

Key words : tourism studies, affective turn, affect/affectus, Spinoza

1. はじめに

ヒトはモノをいかに「感知」するのか。ハイブリッドなアクターたちのネットワークとしての「地域芸術祭」を分析・考察する中で、筆者には、ヒトはモノのエージェンシーをどう感取し、どう反応するのか、そして「アートのなるもの」をめぐる「アートネクササス」がいかに生成するのかという基本的な疑問が残った。それは感知と感情／情動の生成・変化の問題であった。すなわちモノとヒトを対称的に扱うアクターネットワーク論（ANT）においてモノやヒトのエージェンシーが作用するというとき、ヒトはモノやヒトにどう刺激され、感情／情動が生成するのか。そして感取した刺激がどのような認識と結びつき、どのような感情／情動を生成するのだろうか。その過程を明らかにするには、様々なアクターたちによって形成されるハイブリッドなネットワークを、あらためて「アフェクト」の関係、すなわち「相互的に作用・影響（アフェクト）し／される」関係の中にあることを、アフェクト論（情動論）的に解明し直し、アフェクトゥス（感情）感取の連鎖、本論でいう「感情ネクサス」についての理論的な解明が必要である。バルーフ・スピノザの『エチカ』を読み込みつつ、感知、感情／情動、倫理などをキーワードに、その問題に対峙してゆく。

1-1 「感情労働論」批判

近年における観光研究の理論的な変遷をたどると、まなざし論からパフォーマンス論、モビリティ論、そして存在論へと進展してきている。それは観光研究の拡張であり深化といえよう。まだ不十分と考えられる大きな研

究領域が感情（アフェクトゥス）の領域である。他の研究分野においては2000年代に入って感情／情動を対象とし「アフェクティヴ・ターン（情動論的転回）」の名称のもとでアフェクトゥス研究が始まっているが、観光研究の領域でこそ真剣に取り扱われるべき課題であるといえよう。ホスピタリティ産業はヒトとヒトの接触が必須でありヒトへの接応が重要視される「感情産業」であると言われ、アーリー・ホックシールドの『管理される心』（2022年）が多く引き合いに出される。ここではまずその感情労働論と本論のアフェクティヴ・ターンの違いについて明らかにする。

ホックシールドの『管理される心』は、サービス労働における感情の商品化や感情の表出／抑制に関する労働過程論的分析が中心で、本論が目的とする「影響・作用（アフェクト）し／される」存在論的な世界認識のごく一部に焦点を当てた論考であるといえよう。もちろん感情労働者にとって「感情の疎外」は大きな問題である¹⁾。ホックシールドは、感情に関する基本的な認識は本論と共有しており、「感情とは現実と自己の関係について教えてくれる感覚のことであり、それによって自分が何を欲し期待していたはずなのか、どのようにして世界を認識してきたはずなのかを推定する。物事に対する埋もれていた見方を発見するひとつの方法である。自分自身を位置づけるための、主要な方法となる」（ホックシールド, 2022, p.97）と説明している。しかし彼女の議論は、職場における感情の管理・規制、そして深層演技と表層演技などについての分析に焦点が当てられ、ヒトが身体を通していかに世界を認識するのか、そのときの感情／情動のあり方がいかなるものかを明らかにしようとするものではなかった。

『管理される心』の翻訳者石川准は、岡原正幸の『ホモ・アフェクトス』（1998）を引用して、「感情社会学は詐欺的商法である。…感情そのものは扱われ（ず）、感情をめぐる構成的あるいは規則的な要素、たとえば『感情文化』が語られるだけだ」といい、「『生きられた感情』の具体的ありようはすつとんだ」（岡原, 1998, pp.1-3）と述べる（石川, 2016, p.39）。本論では

この「生きられた感情」を解明しようとしたのが、17世紀の哲学者 B. スピノザの『エチカ』であり、その後の「アフェクトゥス」研究であると捉えている。

1-2 観光現場での「感情ネクサス」

本論では、感情労働の場面へと議論を収斂させる方向ではなく、モノとヒトが身体を媒介として「アフェクトし／される」相互関係の原点に戻って捉え直す必要性を強調する。存在論的世界認識の問題を、労働環境の問題だけに矮小してはならないと考えており、より普遍的な人間にとっての感知・アフェクトゥス（感情）へ、そして「アフェクティブ・ターン」へと議論を進めることを目的とする。

観光現場では、その生きられた感情／情動がどのように生成し、「感知」され、そして次のアクターに働きかけるのであろうか。すなわち「感情ネクサス」の生成・感知・対応・発信についての理論的な解明はほとんどされていないのが現状である。その解明のためには、まず感情／情動というものがどのように生成し、ヒトはどのように感情／情動を感知しているのか、そして生成した感情・情動が次のアクターにどのように「影響・作用（アフェクト）し」、次なる感情／情動を生成させるのかについて明らかにする必要がある。

本論では畠中尚志翻訳（岩波文庫）の『スピノザエチカ（倫理学）』（2021a）に倣ってアフェクトゥス（*affectus*）に「感情」を当てて考察し、その「感情ネクサス」の生成過程を明らかにする²⁾。

2. 感覚からアフェクト（情動）へ：アフェクトゥスへの人類学的アプローチ

ティム・エデンサーは「廃墟歩き」を、狩人のように感覚が鋭く研ぎ澄まされ、場所の脱親密化や歩く身体の力を弱める危険を察知する特別な感覚が

生起する経験だったという（Edensor, 2016）。見捨てられ脱中心化された空間は、理解されることのない過去に満ちており、「感覚が場所化され、感覚が場所を作る」ところで、「動物に生成する」契機になるという（橋本, 2022, p.76）。「感覚人類学（anthropology of senses）」と呼ばれる潮流は、1980年代以降の身体に対する関心の高まりとともに、心身二元論や言語中心主義的な社会分析への批判として提出され、デイヴィッド・ハウズが「感覚論的転回（sensual turn）」（Howes, 2003）と呼んだ身体感覚への着目がなされたこと、石井美保他が『官能の人類学』（2022）の序章でまとめている。それは「一つの個体だけで完結するものではなく、周囲の環境や他者たちと応答しあい、溶けあいながら自他を変容させていく、感応＝官能する器官としての身体なのである」（石井他, 2022, p.2）。その本には観光現場と関連する論文が2つあり、ポールダンサーと男性客とのチップの受け渡しをめぐるやり取り（コーカー, 2022）や、性風俗店で働く「おんなのこ」たちが客にどのように「感能」を行使するかなど（熊田, 2022）を扱っている。いわば性的サービスの「接遇」現場での「感覚労働」の様子が描かれている。

西井涼子・箭内匡編著の『アフェクトゥス——生の外側に触れる』（2020）では、身体を中心とした存在論的世界におけるアフェクトの問題が扱われている。「人が生きるとは身体として生活することであり、その身体は、人間であれウイルスであれ、他の身体との絶え間ない『アフェクト』の関係——相互的に影響・作用（アフェクト）しあう関係——の中にあること」であり、「身体として世界に内在するものである」ことを再認識したという（西井・箭内, 2020, p.1）。「アフェクト（affect）」の概念は、B.スピノザの『エチカ』の「アフェクトゥス（*affectus*）」に遡り、「自然のなかの様々な個体が相互に影響・作用（アフェクト）し／される」ことと関係する。このスピノザの「アフェクトゥス」はジル・ドゥルーズによって現代的な再解釈が与えられ、1990年代半ばからブライアン・マッスミ（1999, 2021）によって「アフェクト」の概念が注目され、2000年代後半に「アフェクト理論」ないし「情

動論的転回」と称せられる学的潮流が生まれ（西井・箭内, 2020, p.2）、*The Affect Theory Reader*（Gregg & Seigworth, 2010） や *The Affective Turn*（Clough & Halley, 2007）などの論集が出版された。

これらのいわば英語圏での「アフェクト論」は、西欧近代的な人間観を脱して、人間の行為が非意図的な、本人が認知しない身体的次元でおこっていることに着目し、それを通して個と集合性の問題に改めてアプローチしようとする企てである。主体の意識や感情の底部には我々の生に決定的な影響を与えるような「アフェクトの群れ」があることを示し、生の現実において微細なものがもつ力に目を向けさせた点で重要であると西井・箭内は指摘する（西井・箭内, 2020, p.2）。しかしそれだけではスピノザやドゥルーズの提起しようとした「世界の見方の根本的な転倒」が見逃されてしまうと批判し、アフェクト／アフェクトゥスによる世界の見方の根本的な転倒、すなわち存在そのものをアフェクトの相のもとで捉え直すことが重要であるという（西井・箭内, 2020, p.2）。「存在とは（人間も動物も植物も石…も）、影響・作用されることの中で生まれそして崩壊し消えていくことそれ自体である、という方向から物事を眺めるということである」といい、第一に「生の把握における重心を『存在』よりも『アフェクト』に向けて移動させる」ことを主張する。第二に「目に見え体験されるものの水面下での異質で複雑な内在的な力の絡まり合いを、生の潜在性として捉えなおしながら現実を志向する」ことを挙げる。そして「生の外側に触れる」というその本の副題にあるように、外部を召喚する過程・装置としての「情動」を、外部を受け入れる運動として捉え直し、「生とは、生の外側に触れることで初めて、生として存在し続ける」というテーマを明らかにし、生そのものを清新な視野のもとで眺め直すことを提案している（西井・箭内, 2020, p.3）。

3. 感知すること：「部分的つながり」とコナトウス（身体活動能力）

感情の「感知」について明らかにするために、『スピノザ エチカ（倫理学）』（2021a）を読み込んでいた中で感じたことは、マリリン・ストラザーンの『部分的なつながり』（2015）における「部分と全体の関係」との親和性であった。部分的なつながりを辿って考察することでしか全体を知ることができないというストラザーンの認識のあり方は、スピノザのいう個物を捉えるだけの「想像（知）」ではなく、個物を通して全体（神即自然）を知るという理性による認識を具体的に進展させる「直観知」のあり方と重なってくる。まず「感じ・知る」ことに関するスピノザの三種の認識についてみてみよう。

3-1 三種の認識：想像知、理性、直観知

「水は水である限りにおいて分割されまたその諸部分は相互に分離されると我々は考える。しかしそれが物的実体たる限りにおいてはそうではない。その限りにおいては水は分離されも分割されもしない。さらに水は水としては生じかつ滅する。しかし実体としては生ずることも滅することもない」。以上のことは、「表象と知性を区別することを知っている全ての人に十分明白であろう」（スピノザ, 2021a, pp.66-67）とスピノザはいう。スピノザの翻訳も手掛けている工藤喜作は「想像力（イマギナティオ）」による認識を「想像知」と訳し、「知性（インテクトゥス）」による認識との違いについて解説している。工藤によると、第一種の認識「想像知」は身体の変様をそのまま認識する認識で、とくに身体の変様の観念といわれ、感覚的認識であることを意味している。第二種の認識「理性（ラティオ）」は身体の変様において自分の身体と他の物体にとって共通なものを認識する。それは共通概念といわれる。普遍的な認識とも言われるが、それは自他にとって共通なものを通じて自他の一致を見いだす認識であるという（工藤, 2021, p.15）。

工藤のいうように「想像知」によってものをとらえるかぎり、ものは対象

化され、分割され、そしてその分割された諸部分（個物）から成り立つものとみなされる。しかも分割された諸部分は実在的に区別され、一が他なしにありうるように、相互に独立したものとみなされる。ところが同じものを「知性」（または理性）によってとらえるならば、諸部分は、一が他なしにありえないように、相互に関連したものとみなされる。つまり諸物体は様態的に区別されるだけであって、結局ものは全体としての実体の変様とみなされる（工藤, 2021, p.11）。スピノザは事物を観想する様式について、「イマジナティオ（表象・想像力）」によるものを第一種の認識と呼び、「ラティオ（理性）」によるものを第二種の認識と呼ぶ。

そしてこれら二種の認識のほかに、「直観知（スキエンティア・イントゥイティヴェ）」と呼ぶ第三種の認識があり、「神のいくつかの属性の形相的本質の妥当な観念から事物の本質の妥当な認識へ進むものである」（スピノザ, 2021a, p.172）とスピノザはいう。工藤は理性によって得られた神の認識から個物の認識に移ると指摘し、個物が神（または神即自然）の変様であること、あるいは個物のうちに神の働きを見る認識が直観知であるという。第二種の認識である理性においては一般的にしか見ることができなかったが、直観知では具体的にそれぞれの個物において見るのである。たんに個物を認識するだけであるなら、想像知においても可能であるが、直観知は、それぞれの個物のうちに神がいかに働いているかを、個物の本質の認識を通して知る神の認識でもあったと工藤はいう（工藤, 2021, p.16）。本論ではスピノザのいう神（または神即自然）を、観光の場における「全体」またはモノ（自然）の本来のあり方と読み替えることになる。

個物が神の変様であること、個物のうちに神の働きを見るという「直観知」のあり方は、次に紹介するストラザーンの「部分的なつながり」のなかに「全体」を見るという認識の仕方に通じる。

3-2 「部分的つながり」と全体

部分と全体の関係の例として、カオス理論のフラクタル図像のもっとも有名な例である不規則に刻みこまれた海岸線をストラザーンはあげる。「大きなスケールの地図を見ても、それぞれの入り江や砂浜の違和を調べても、スケールは変化するが不規則さの量は変わら」ず、まるで「海岸線の長さが増しても、それが取り囲む面積は増えないかのようであり、二つはぴったりと重なり合わない」（ストラザーン, 2015, p.35）という。そして、「コントロールの塵」を事例としてあげる。1本の線を3等分して中央部を取り除き、残った各部分を3等分しては、その中央の3分の1をとっていく過程を繰り返してできた残った点の「塵」を、コントロール集合という。この塵の数は無限になるが、全長は変わらないのである（ストラザーン, 2015, p.67）。

そしてストラザーンはニューギニア高地に広くみられる例をあげる。一人の男の記述がその氏族の記述として完璧であり、氏族の記述が一人の男の記述として完璧であるならば、「同じ」情報がそれぞれのレベルで繰り返していることになる。緻密さの度合いを普遍にしているように見えるのは、観察者／行為者の知的活動（すなわちスピノザの理性による認識）である。かくして、ひとつの「小さな」事物は「大きい」事物と同じ量であることができるとストラザーンはいふ（ストラザーン, 2015, p.33）。「大小の差異が元どおりになるのだとすれば、それはパースペクティブやレベルを修復し、それに付随する記述の部分性の感覚を取り戻すことによるのみ、なされるのである」と部分性を強調する。「無数のパースペクティブによる相対化の効果は、すべてのものが部分的であるように見せ、類似した命題や情報のかけらの繰り返しは、すべてが繋がっているように見せる」という。これがコントロールの塵が表す「部分的なつながり（partial connections）」である（橋本, 2018, p.73）。本論でいう「直観知」の働きをここに見ることができる。

3-3 アフェクトゥス（感情）とアフェクティオ（変状）、コナトゥス（身体活動能力）

『エチカ』第三部「感情の起源および本性について」の定義三でスピノザは、アフェクトゥス（感情）とは、「われわれの身体の活動能力を増大しあるいは減少し、促進しあるいは阻害する身体の変状〔刺激状態〕、また同時にそうした変状の観念である」という。そこでもし「我々がそうした変状のどれかの妥当な原因でありうるなら、その時私は感情を能動と解し、そうでない場合は受動と解する」（スピノザ, 2021a, p.202）と定義する。翻訳者の畠中尚志は第一部の訳者注においてこの「変状（アフェクティオ）」を、「すべてある物が刺激ないし触発によって呈する一定の状態」であるという。訳語として「変状」「刺激状態」「顕現」「発現」「発動」「触発」などが当たると解説する（スピノザ, 2021a, p.314）。

スピノザは基本的感情として「喜び、悲しみ、欲望」の三つをあげる。これらは我々の身体活動能力（コナトゥス）を増大しあるいは減少し、促進しあるいは阻害するものである。コナトゥスは、ものの現実的本質と見なされているが、いわば「ものの生きる力」である。この「生きる力」としてのコナトゥスが、人間を動かす感情の基礎となっているのである。第三部定理六で「おのおのの物は自己の及ぶ限り自己の有に固執するように努める」（スピノザ, 2021a, p.214）というが、この努力が「コナトゥス」である。基本的な三感情に関しては、人間のあらゆる努力、あらゆる本能、あらゆる衝動、あらゆる意思作用が「欲望」であり、コナトゥス（身体活動能力）を増大・促進するのが「喜び」であり、減少・阻害するものが「悲しみ」ということになる。定理九備考で「この努力が精神にだけ関係する時には意志と呼ばれ、それが同時に精神と身体とに関係する時には衝動と呼ばれる。したがって衝動とは人間の本質そのもの、——自己の維持に役立つすべてのことがそれから必然的に出てきて結局人間にそれを行わせるようにさせる人間の本質そのもの、にほかならない」という。「欲望とは、意識を伴った衝動である」と

定義され、衝動と欲望との相違は、「欲望は自らの衝動を意識している限りにおいてもっぱら人間について言われる」。そのため「欲望とは意識を伴った衝動である」と定義されるのである（スピノザ, 2021a, pp. 216-217）。

そして「喜びを精神がより大なる完全性へ移行する受動と解し、これに反して悲しみを精神がより小なる完全性へ移行する受動と解する」（スピノザ, 2021a, p.218）という。「精神と身体とに同時に関係する喜びの感情を快感あるいは快活と呼び、これに反して同様な関係における悲しみの感情を苦痛あるいは憂鬱と呼ぶ」。注意すべき点として、快感および苦痛ということが人間についていわれるのは、「その人間のある部分が他の部分より多く刺激されている場合」であり、これに反して「快活および憂鬱ということが言われるのは、その人間の全ての部分が一樣に刺激されている場合である」という（スピノザ, 2021a, p. 218）。

3-4 「喜び、悲しみ、欲望」と「驚き」

第三部定理五九証明で「すべての感情は、… いずれも欲望、喜びあるいは悲しみに関係している」（スピノザ, 2021a, p. 283）という。この「喜び、悲しみ、欲望」が基本的な三感情であり、もろもろの感情はこの三者が種々の仕方で相互に組み合わせられて、数えきれないほど多くの変種が生じるのである。他の感情がこの三感情と連結し移行する様子を、以下に述べていく。

(1) 基本的な三感情と他の感情の関係

「愛と憎しみ」が「喜びと悲しみ」さらに「好意と憤慨」に連結・移行する。スピノザは定理一三備考で「愛とは外部の原因の観念を伴った喜びにほかならないし、また憎しみとは外部の観念を伴った悲しみにほかならない」（スピノザ, 2021a, p.221）という。定理一九証明で「精神は身体の活動能力を増大しあるいは促進するものを…、言い換えれば…自分の愛するものを、できるだけ表象（想像）しようと努め、…精神の努力を促進する、言いかえ

れば…精神を喜びに刺激する。これに反して愛するものの存在を排除する事物の表象像は、精神のこの努力を阻害する、言いかえれば…精神を悲しみに刺激する」のである(スピノザ, 2021a, p.229。以下()内は筆写)。定理二七備考で憐憫について、「われわれはこれを他人の不幸から生ずる悲しみである」という。さらに「愛と憎しみ」を「好意と憤慨」に結びつけ、「我々は他人に善をなした人に対する愛を好意と呼び、これに反して他人に悪をなした人に対する憎しみを憤慨と呼ぶ」という。

定理二七備考では「欲望」が「喜びと悲しみ」、さらに「憐憫と競争心」と関係することを説明する。「感情のこの模倣が悲しみに関する場合には憐憫と呼ばれる。しかしそれが欲望に関する場合は競争心と呼ばれる。ゆえに競争心とはわれわれと同類の他のものがあることに対する欲望を有すると我々が表象(想像)することによって我々の中に生ずる同じ欲望にほかならない」。すなわち、我々に似ているだけではいかなる感情も抱かないのに、それがあつた悲しみの感情に動かされていると想像される場合は、想像しただけでそれと似た悲しみの感情に動かされるのである。また定理二七系三備考で「あるものを憐れむことから生ずる、そのものに親切をしてやろうとするこの意志ないし衝動は慈悲心と呼ばれる。したがってこれは憐憫から生ずる欲望にほかならない」という(スピノザ, 2021a, pp.238-239)。

(2) 諸感情の定義

スピノザは第三部最後の「諸感情の定義」のはじめの部分で基本的な三感情についてまとめている。(一)「欲望とは、人間の本質が、与えられたそのおのおの変状によってあることをなすように決定されると考えられる限りにおいて、人間の本質そのものである」と定義する。工藤・斎藤訳(スピノザ 2021b)では、欲望は人間の本質そのものである。人間は与えられたおのおの変状によってあることをなすように決定されていると考えなければならぬと説明する(スピノザ, 2021b, p. 265)。スピノザは「欲望」を、

人間のあらゆる努力、あらゆる本能、あらゆる衝動、あらゆる意思作用と解するといい、定理五六の備考で特に著しいものとして、「美味欲、飲酒欲、情欲、貪欲および名誉欲」をあげる（スピノザ、2021a, p.279）。(二)「喜びとは人間がより小なる完全性からより大なる完全性へ移行することである」といい、(三)「悲しみとは人間がより大なる完全性からより小なる完全性へ移行することである」と「喜びと悲しみ」を「移行」に伴う感情として説明する。先に示したように快活、快感、憂鬱、および苦痛は、主として身体に関係し、喜びもしくは悲しみの種類にすぎないという（スピノザ、2021a, pp.288-289）。

(3) 「驚き・驚異」

次に「驚き・驚異」について取りあげる。驚きは、本論で分析対象とする「地域芸術祭」におけるアート作品を見る時に特に重要であると筆者は考えている。しかしスピノザは「欲望、喜び、悲しみ」の三感情を基本と考えており、「驚異を感情の中に数えない」（スピノザ 2021a:289）という。それに対し訳注で畠中は、デカルトは六感情説をとって「驚異、愛、憎しみ、欲望、喜び、悲しみ」を基本感情としていると紹介し、『エチカ』においてスピノザはそのデカルトの説に批判的に立ち向かっていると解説する（スピノザ、2021a, p.348）。

「諸感情の定義」でスピノザは、「驚異とはある事物の表象が極めて特殊なものであってその他の表象と何の連結も有しないために、精神がその表象に縛られたままである状態である」（スピノザ、2021a, p.289）と定義する。工藤・斎藤の訳（スピノザ、2021b）が分かりやすいので、それから引用すると、「驚きとは、精神がそれに捉われると動けないように呪縛されてしまうような想像」であり、「精神がそれほど没頭してしまうのは、その想像が特殊であり、それ以外の想像とはまったく関連をもたないからである」という。精神はどのような根拠で一つのものの思想からただちに他のものの思想に

うつるのだろうか。そのようなものの像はたがいに結合しあって、しかも一方のものが他のものを必然的に導くように秩序づけられている。ものの像が新奇なものである場合、人はそれを概念的に把握することはできない。むしろ精神が他の原因によって、他のものを思索するように仕向けられるまでは、精神はそれを見つめるようにひきとめられているというスピノザの指摘は重要である。その「新奇なものについての想像も、それ自身で見れば、他の想像と同じ本性のものである」から、「驚きを感情の中に数えないし、感情の一つとみなさなければならない理由も私にはわからない」（スピノザ、2021b, p.268）と工藤・斎藤訳でスピノザはいう。「精神にこのような隔離作用が生ずるのは、精神を他のものから分離するための積極的な原因に由来するのではなく、むしろ精神が一つの物を十分考えるために、精神に他のものを思惟するように決定する原因が欠如しているという、ただそれだけの理由からである」（スピノザ、2021b, p.269）と感情から「驚き」を外す。スピノザは「ただ三つの根源的感情あるいは基本的な感情として、すなわち喜び、悲しみ、それに欲望の三つだけを承認する」といい、しかも「私が驚きについて言及したのは、三つの根源的感情から派生するある種の感情が、我々の驚く対象に関係するときは、ふつうは別の概念で示されるという理由からである」（スピノザ、2021b, p.269）と説明する。スピノザにとって感情には精神自身の積極的な変化がなければならないのであるが、驚きはただ精神の想像の一結果にすぎないと考えているのである。

しかし「驚き」がアート体験にとって重要であることに変わりはない。「新奇な・驚くべき」アート作品を見たり体験したりしたときを振り返ってみると、自分がどのように感じているのかしばらくは「言葉にならない」状態が続くことがよくある。アート体験のみならず、我々は「言葉にならない」現象に対峙したとき、スピノザがいうように、記憶の中の類似した体験を探り当て、その類似体験が自分にどのような感情をひきおこしたかを思い起こそうとする。「新奇さ」「驚き」は強い刺激となり、様々な感情を喚起する引き

金となる。アート作品の中には我々の通常の感覚を打ち破るような強い刺激を鑑賞者に与え、しばらく思考を停止させ、その後新たな「モノのあり方」に気づかせることを意図したものがある。それは喜び・歓喜の感情を喚起する場合が多いが、中にはアーティストの拙い意図とあざとさに不快・憤慨の感情がひきおこされる場合もある。

(4) 記憶と驚き：発見の喜び

驚きは、先に述べたように感情としては停止状態にあるといえる。それが喜びに移行するか悲しみに移行するかは、その後想起される記憶次第で方向が決まる。記憶の中で認識される感情と照合して、どちらに移行するのが決まるのである。「発見」は記憶の中で参照する対象を容易に想起できず、新たな参照枠を自己の外部から獲得し、そこに価値を見いだしたときの喜び（発見の喜び）であるといえよう。

第二部定理一八備考の注一六で畠中は、「ここに言う記憶 (*memoria*) はむしろ想起 (*reminiscentia*) のことである」(スピノザ, 2021a, p.337) と解説する。スピノザは定理一八で、「もし人間身体がかつて二つあるいは多数の物体から同時に刺激されたとしたら、精神は後でその中の一つを表象 (想像) する場合ただちに他のものをも想起するであろう」という。それは、「精神がある物体を表象 (想像) するのは・・・人間身体のいくつかの部分がかつて外部の物体自身から刺激されたのと同様の刺激・同様の影響を人間身体が外部の物体の残した痕跡から受けることに基づく」のである。ところが、「身体はかつて、精神が同時に二つの物体を表象 (想像) するようなそうした状態に置かれていた。ゆえに精神は、今もまた、同時に二つのものを表象するであろう。そしてその一つを表象する場合、直ちに他のものを想起する」(スピノザ, 2021a, p.147) という。その備考で、記憶 (メモリア) は、「人間身体の外に在る物の本性を含む観念のある連結にほかならない。そしてこの連結は精神の中に、人間身体の変状 [アフェクティオ・刺激状態] の秩序お

よび連結に相応して生ずる」(〔 〕内は翻訳者)と述べる(スピノザ, 2021a, p. 147)。

記憶とは人間身体の変状の観念の連結である。スピノザは第一に、「それは単に人間身体の外側に在る物の本性を含む観念の連結であって、それらの物の本性を説明する観念の連結ではない」という。なぜなら、それは「人間身体の変状〔刺激状態〕の観念に他ならぬのであり、そしてこの観念は人間身体の本性と外部の物体の本性とを含んでいるからである」と定理一六をもちだす(スピノザ, 2021a, p.148)。この「外部」は先に示した本『アフェクトゥス——生の外側に触れる』の副題にあるように、外部を召喚する過程・装置としての「情動」を、外部を受け入れる運動として捉え直し、「生とは、生の外側に触れることで初めて、生として存在し続ける」というテーマとかかわってくるものである。これによって生そのものを清新な視野のもとで眺め直すこと(西井・箭内, 2020, p.3)が可能となろう。

第二に、スピノザは「この連結は人間身体の変状〔刺激状態〕の秩序および連結に相応して生ずる」といい、知性の秩序に相応して生ずる観念の連結とこれを区別する必要があると述べる(スピノザ, 2021a, p.148)。例として軍人と農夫をあげ、身体が記憶している体験によって連鎖・移行する認識が異なってくる。本論でいう、いわば「認識連鎖(ネクサス)」の生成が見られるのである。軍人は、砂の中の馬の足跡を見て、ただちに馬の認識から騎士の認識へ、またそれから戦争やその他の認識に移る。それに対し農夫は、馬の認識から鋤や畑などの認識に移行していくのである。

想起の段階では記憶の中の自らの身体の変状についての確認作業が繰り返される。自らにとってよく知っているものに遭遇しそれを確認しても「驚く」ことはない。一見しただけでは認識・判断が不能のものに遭遇したとき「驚き」、一時的な停止状態に陥る。そして自らの記憶を辿る作業をはじめ、参照対象を想起できないときには、外部の参照枠を新たに「発見」しようと務めるのである。それを発見し、新たな価値に気づいたときに人は「喜び」

を感じ、身体活動能力（コナトゥス）が増大するのである。

4. 「感情ネクサス」の生成

『エチカ』における感情（アフェクトゥス）の説明を読み込んでいくと、本論のテーマである「感情的なるもの」をめぐる「感情ネクサス」が生成される過程を読み取ることができる。言いかえればスピノザの『エチカ』は「欲望、喜び、悲しみ」の三感情をもとにして様々な感情が連鎖的に生成・変化する「感情ネクサス」についての書であるということもできる。スピノザの事例の中から、「感情ネクサス」の生成過程についての解明がなされている部分を拾ってみよう。

4-1 食欲をめぐる感情ネクサス

第三部の最後の注意からは、愛の対象となる食欲が状況の変化によって連鎖的に他の感情に移行していく「感情ネクサス」の様子が読み取れる。まず食欲の対象であった食物の摂取によって欲求が充足され、身体的状況が変化すると、「愛の対象」であったものが「厭わしい対象」に変様する。「我々が我々の衝動の対象物を享受する間に、身体はこの享受によって新しい状態に達し、この状態が身体を別様に決定し、事物に関する別な表象像が身体の中に喚起され、それと同時に精神は異なったことを表象（想像）し、異なったことを欲し始める」（スピノザ, 2021a, p.285）のである。好きな食物の摂取を終えると、感情の状態は変化する。「その味が我々を楽しませるのを常とするあるものを我々が表象（想像）する時、我々はそれを享受すること、すなわち食うことを欲する。ところがそれをこうして享受する間に胃は充実して、身体は別様な状態に置かれる」。それゆえ「身体がすでに別様な状態になっている際、同じ食物がなお現在するためにその表象像がまだ保存されており、したがってそれを食おうとする努力ないし欲望も保存されているとす

れば、あの新しい身体の状態はこの欲望ないし努力と矛盾する」。その結果「先に我々の衝動であった食物の現存が今は厭わしくなるであろう。これは我々が飽満と呼ぶところのものである」(スピノザ, 2021a, p. 286) と説明する。

刺激を受けて、感情／情動が変様して新しい状態に達し、その状態が身体を別様に決定する。ここに感情の連鎖・移行、すなわち「感情ネクサス」が見られるのである。それは次の希望・恐怖においても同じである。

4-2 「希望・恐怖」をめぐる感情ネクサス

定理一八備考二では、希望、恐怖、安堵、絶望、歓喜および落胆が扱われる。「希望とは、我々はその結果について疑っている未来または過去の物の表象像から生ずる不確かな喜び」である。これに反して、「恐怖とは同様に疑わしい物の表象像から生ずる不確かな悲しみ」である(スピノザ, 2021a, p.228)。そして「これらの感情から疑惑が除去されれば希望は安堵となり、恐怖は絶望となる」のである。すなわちそれは「我々が希望しまたは恐怖していた物の表象像から生ずる喜びまたは悲しみである」。そして「歓喜とはわれわれがその結果について疑っていた過去の物の表象像から生ずる喜び」であり、「落胆とは歓喜に対立する悲しみ」であるということになる(スピノザ, 2021a, p. 229)。これらの感情の原因としては、過去にわれわれがその物を見て動揺したか、将来動揺するであろうという場合、身体活動能力(コナトゥス)をえた場合か、それをえるであろうという場合、傷ついたか、傷つくであろうと考える場合である。実は、経験豊かな人物ほど、ものの結果について極めて疑い深いために、「類似した像から生ずる諸感情が首尾一貫しておらず、ものの結果についてもっと確実になるまでは、むしろ他のものの像によってしばしば攪乱される」場合も多いと、工藤・斎藤の翻訳版では述べている(スピノザ, 2021b, p.205)。

ここでも、状況に応じて「希望・恐怖的なるもの」をめぐる安堵と絶望、

さらには歓喜と落胆という感情の連鎖・移行（「感情ネクサス」）を読み取ることができる。

5. アートネクサスと感情ネクサス

「アートのなるもの」をめぐる生成する「アートネクサス」の具体的な現場で、「自然のなかの様々な個体が相互に影響・作用（アフェクト）し／される」感情のネクサスについて事例を2つあげて考察する。

5-1 「思い」をめぐる「感情ネクサス」の生成：「絵本と木の実の美術館」

「越後妻有 大地の芸術祭」は2000年から開催されている。アーティストは地域に滞在し、そこで「影響・作用（アフェクト）され」ながら作品制作をするように求められる。鉢集落の真田小学校が2005年に廃校になった。絵本作家の田島征三は最後の児童三人を主人公にして、海辺で集めた流木や木の実などの自然物に絵の具を塗って立体絵本「絵本と木の実の美術館」を2009年に制作した。よその小学校に転校した三人がもとの小学校の様子を見に来たところ、トペラトトというオバケがいて、思い出を食べていた。三人が校舎に入り各教室をめぐる退治をするとオバケは学校の思い出をすべて吐き出し、学校がよみがえったというストーリーである。鉢の人々が小学校に抱く「思い」が、アーティストに「影響・作用（アフェクト）」し、子供とオバケが活躍するストーリーに「翻訳」されたのである。鉢集落の住民は皆この小学校の卒業生であり、制作時には大勢が戻ってきて手伝った。学校は閉鎖されたが、「カラッポにはならなかった」のであった（橋本, 2018, pp.154-155）。

廃校になった小学校には地域の人々のさまざまな「思い」が蓄積されている。廃校がただモノとしてあるだけではヒトを巻き込むことはない。アーティストは地域の人々のモノに寄せる「思い」を「翻訳」し、モノへの働き

かけ（作品制作）を始めた。それがきっかけとなり、モノにまつわる「思い」が喚起され、地域の人々の身体活動へと「翻訳」されたのであると、筆者は『地域文化観光論』で ANT における「翻訳」作業を参考に分析をおこなった（橋本, 2018, p.155）。しかしながら地域の人々の「思い」とはなんなのか、そしてそれがどのように人々の身体を刺激するのかについての分析は不十分であった。本論ではスピノザに倣って、いかに「自然のなかの様々な個物が相互に影響・作用（アフェクト）し／する」のか、そして刺激された身体を介してどのような認識へと繋がり、どのような感情／情動に連鎖・移行していくのかについて分析してみよう。

モノにまつわる「思い」とは、先に述べた「記憶」である。そして、訳者畠中によれば「記憶（*memoria*）はむしろ想起（*reminiscentia*）のこと」ということになる。スピノザは、記憶とは人間身体の変状の観念の連結であり、「それは単に人間身体の外部に在る物の本性を含む観念の連結であって、それらの物の本性を説明する観念の連結ではない」という。なぜなら、それは「人間身体の変状〔刺激状態〕の観念に他ならぬのであり、そしてこの観念は人間身体の本性と外部の物体の本性とを含んでいる」（スピノザ, 2021a, p.148）ことになるからである。身体を通した「思い」は、知識だけの単なる記憶ではない。鉢集落の人々の廃校となった小学校への「思い」は、人間身体の外にある「モノの本性を含む観念の連結」である。それは掃除の時間に机を運び、床や窓を拭いたときの手の感触、黒板にいたずら書きをして急いで消したときに感じたチョークのにおいなどを通して刺激を受けた人間身体の変状の観念である。すなわち身体感覚を通した「記憶」であり、その記憶によって生起された感情である。まずは懐かしいという感情、つぎに廃校になったときの悲しさ・残念さの感情が喚起されたであろう。しかしながらアーティストの介入によって「廃校」を「絵本と木の実の美術館」に変えるという状況の変化によって小学校での「楽しい」記憶がよみがえり、新たな希望の感情が生起したといえよう。それが人々の身体活動能力（コナ

トウス)を増大・促進し、美術館制作活動への参加を促したのである。ここに状況の変化に応じて感情が連鎖・移行する「感情ネクサス」がみられる。この感情ネクサスの根本感情を探っていくと、「喜び」が認識され、そこに生を維持するコナトウスの動きを感じ取ることができるのである。

5-2 「アフェクトの群れ」の生成：「柵守る竜神の御座」

2000年開催の「大地の芸術祭」期間中の50日間だけという条件でやっと松代の城山集落の許可を得て、國安孝昌はもと柵田だった場所に無数の間伐材と煉瓦を主材料にした「竜神の御座」を現地でひとり黙々と築き上げようとした。この作品は稲と田の人々の命を守る竜神が降臨する依り代をイメージしたものであった。ときには学生のサポーターも手伝ってはいたが、学生は足腰が定まらない。煉瓦を重ねて、木を組み針金で巻くという一連の作業は、組んだ素材がうまく固定できずに難航していた。針金で丸太を縛るには熟練の技術が必要だが、学生たちの作業はおぼつかない。それを冷やかしながら遠巻きに眺めていた集落の年寄りたちは、あるとき「大地の芸術祭」総合ディレクターの北川フラムから「やってみますか」と声をかけられると、ついにこらえきれなくなって手伝いに参加したという。年の効で要領をつかんでおり、幼馴染ばかりでチームワークもよく、作業がどんどん進んでいった。作家ひとりの手では実現不可能な規模の作品が、「地域が手をさしのべることによってはじめて完成が見えてきた」。おそらくその瞬間に「竜神は作家の手を離れ、地域の人たちの作品になった」と北川は指摘する（北川, 2014, p.125、橋本, 2018, p.134）。

竜神の展示は期間中50日間だけという条件だったが、会期が終わってもだれも撤去を求めなかったという。1年経過したところに作家の國安はひとりで作品のメンテナンスをしていた。第二回芸術祭を終えてもまだ解体されず、震災や積雪によって痛み、木材がやせ、いよいよ作品がもたないとなった2006年の第三回芸術祭のときに、地元の人たちは自分たちの誇りとなっ

た作品の手直しに手をあげた。十日町の消防団まで出動し、最初の作品より大掛かりな「柵守る竜神の塔」を作りあげた(北川, 2014, p.125、北川, 2015, pp.98-100)。作品を支えた地域の老人たちは、訪れる人びとに作品を語り、アーティストとの交流を語り、ついには自分たちの集落や家族のことまで話をしている。

親和性のある身体的な動きがヒトを誘い、動かしたのである。地元住民が得体の知れない「現代アート」の作品作りに参加するためには、さまざまな仕掛けが必要であった。「柵守る竜神の御座」では、作業自体の質とアーティストが数か月にわたって提示する熱心さが誘因になった。針金で丸太を縛る技術は丸太で足場を組む時に必要な技術(モノ)で、長年の農作業などを通じてそれを身体感覚としてもっている老人たちは、不器用な他者(学生たち)の作業を見ているとつい身体がうずき始め、お手本をみせ、ちょっとしたコツを教えたくなくなったのである。現代アートは外部のモノであり、理解できず近づきたい対象であった。しかし、制作段階に入り、数か月にわたって見ていると、作業は親和性のある身体運動の繰り返しであると認識することになった。アーティストの作業(モノ)を見て、地元の人々の身体が動き出した様子が見てとれると、『地域文化観光論』ではANT的な分析を行った(橋本, 2018, p.135)。

ここでも、(5-1)の「絵本と木の実の美術館」での分析と同様に「感情ネクサス」の移行を追うことが可能である。しかし視点を変えて、西井・箭内の「アフェクトの群れ」と「外部」召喚の装置について考えてみることにする。作品制作に参加し、その後維持しようとした動きは、地域の人々の身体を通して周囲の環境や他者たちと応答しあい、溶けあいながら自他を変容させて、地域のものとなり誇りとなったモノが人々の生に大きな影響をあたえる「アフェクトの群れ」(西井・箭内, 2020, p.2)を生成させたといえよう。作品という目に見え体験されるものの水面下での異質で複雑な内在的な力の絡まり合いを、過疎化が進み、休田が目につくようになったこの地域に住

む人々の「生の潜在性」として捉え直すことが重要である。作品制作への参加と維持活動は、竜神を含めたアーティスト・鑑賞者／観光者などの「外部」召喚の装置として外部を受け入れる運動となったのである。このようにここで生成変化するさまざまな「アフェクト（情動）」を捉えることができよう。

6. おわりに：想像知、理性、直観知から「観光の倫理」を考える

個物としての存在を「想像知」で捉えるかぎり、モノは対象化され、分割されて成り立つものとみなされ、身体の変様はそのまま感覚的に認識される。しかし「理性」は身体の変様を見るとき、自分の身体と他の物体にとっての共通なものを認識する。それは共通概念といわれ、自他にとって共通なものを介して自他の一致を見出す認識となる。この「知性・理性」によって捉えると、一つの部分が他の部分なしではありえないように、相互関連したものと捉えられる。諸物体は様態的に区別されるだけで、個物は全体としての実体の変様とみなされる。「直観知」によって、理性によって得られた神（神即自然、または全体）の認識から個物の認識に移る。「理性」においては一般的にしか見ることができなかったものが、「直観知」においては具体的にそれぞれの個物においていかに神（全体）が働いているかを認識する（工藤, 2021, p. 16）。すなわち個物の本質の認識を通して全体の認識に至るのである。

地域芸術祭で地域を訪れたアーティストと過疎地域で生を営む人々は、「ともに自らの個体の生が他者からの影響・作用を通してかたちづくりられ、それらの影響・作用が積み重なって集まりを形成し、そのような集まりが外部との出会いを通して変容していく」（中川, 2022, p. 518）現場を経験しているのである。現代アート作品を制作するアーティストのみならず、彼らを受け入れともに制作活動を進めている地域の人々は、自らの「生の外側」に触れ、影響・作用されることで「生として存在し続ける」世界のあり方を受け

入れ、そこを生きているといえよう。

人間は自然の一部であり、必然的に感情に支配される状態にある。『スピノザ エチカ 倫理学』は人間がこの状態からいかに脱するかを問題にしているともいえる。「自然の一部」でありながら、人間は非十全な認識をし、他の諸部分を自分と対立するもの、すなわち敵としてしまう。あたかも自分が自然の外にあるかのように自然を対象化し、それを征服しようとするのである。しかし自然は無限に強大で、人間は圧倒され、受動的な存在となり、受動感情の虜になると、工藤はいう（工藤, 2021, p. 19）。しかし、「真に人間が自然の一部となる」ためには、他のものと一致しなければならない。そのためには「理性・直観知」が人間のコナトゥスを導き、他のものと一致して活動力を高めることが必要である。コナトゥスは「想像知」による非十全な認識のもとでは自己中心的なものであったが、「理性・直観知」のもとでは「倫理的な徳」となる。工藤は、スピノザの倫理観は、コナトゥスを基本にして人間の倫理的な生活を考えているので、すぐれて現世肯定的であるという。スピノザは「まず生きること、それも理性的に生きingことをすすめる」（工藤, 2021, p.19）のである。

最後に、「観光の倫理」に関していえば、「理性による十全な認識」によって「自他の一致」すなわち「真に自然の一部となるために、他のものと一致しなければならない」というテーマが浮かび上がってくる。非十全な認識、すなわち想像知から生じてくる受動感情は、他と対立して圧倒し／される時に生じてくる感情である。他から圧倒され、自分の活動力が減退するとき、悲しみの感情が生じ、逆に圧倒し、活動力が増大するとき、喜びの感情が生じる。しかし他者の悲しみを自分の喜びとするような感情は、健全ではない受動感情である。それに対し能動感情は十全な認識から生じ、人間相互を対立したものとみなさず、共通なものを通して自他の一致を見る認識である。この能動感情こそ、自他の一致から相互の活動力を高めあうものであり、「和合」の感情であると工藤はいう（工藤, 2021, p.19）。「観光の倫理」は、

自他の対立を喚起する非十全な認識から生じる受動感情ではなく、まさにこの能動感情から生じる「自他の一致」を感取し、「自然の一部である人間」を十全に認識する「観光者」が育成されることを目指すべきことを教えるのである。

注

- 1) ホックシールドによるこの「感情労働」研究が、その後の「感情社会学」という新たな研究領域を切り開いた点はおおいに評価されるべきであろう。
- 2) 本論では、身体を媒介にして、なんらかの刺激を感知し、それを記憶と照らし合わせて認識し、表出する感情の生成・変化の過程に注目する。アフェクティブ・ターンにおけるアフェクト・アフェクトゥスの働きを、「影響・作用し／される」相互的な過程として注目する。工藤喜作は、スピノザのいう「コナトゥス」が生きる力として人間を動かす感情の基礎となっており、他のものとの関係において自分の本質を実現する力となると解説する。この自己実現の努力あるいは力が、精神に関係する場合は意志と呼ばれ、精神と身体とと同時に関係するときは衝動と呼ばれ、その衝動を特に意識したものが、欲望と呼ばれる。その力が増大したとき喜びの感情が生じ、減退するとき悲しみの感情が生じる。この欲望、喜び、悲しみの三つがスピノザの基本感情である（工藤, 2021, pp.17-18）。

参考文献

- Clough, Patricia Ticineto & Halley, Jean (eds.) (2007) *The Affective Turn: Theorizing the Social*, Duke University Press, Durham and London
- Deleuze, Gilles (1990) *Expressionism in Philosophy: Spinoza*, Trans. Martin Joughin, New York: Zone
- Edensor, Tim (2016) "Walking Through Ruins," in ed. by Tim Ingold and Jo Lee Vergunst, *Ways of Walking: Ethnography and Practice on Foot*, Routledge London and New York, pp.123-141
- Gregg, Melissa and Seigworth, Gregory (eds) (2010) *The Affect Theory Reader*, Duke University Press, Durham and London
- 橋本和也 (2018) 『地域文化観光論 ——新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版
- ホックシールド、アーリ、R. (2022) 『管理される心 ——感情が承認になるとき』石川 准・室伏亜希訳 世界思想社
- Howes, David. (2003) *Sensual relations: Engaging the senses in culture & social theory*, Ann Arbor, MI: University of Michigan Press

- 石井美保・岩谷彩子・金谷美和・河西瑛里子編（2022）『官能の人類学——感覚論的転回を越えて』ナカニシヤ出版
- 石川准（2016）「ホックシールド『管理される心——感情が商品になるとき』」『日本労働研究雑誌』No.669 / April pp.36-39
- 北川フラム（2014）『美術は地域をひらく——大地の芸術祭 10 の思想』現代企画室
- （2015）『ひらく美術——地域と人間のつながりを取り戻す』筑摩書房
- コーカー、ケイトリン（2022）「ダンシング・カンノウ——ポールダンスからみたエロスの人類学」石井美保他編『官能の人類学——感覚論的転回を越えて』ナカニシヤ出版 pp.139-161
- 工藤喜作（2021）「『エティカ』をどう読むか」『スピノザ エティカ』工藤・斎藤訳 中央公論新社 pp.1-26
- 熊田陽子（2022）「『感能』がもたらす官能の経験——生風俗店で働く「おんなのこ」たちをめぐる」石井美保他編『官能の人類学——感覚論的転回を越えて』ナカニシヤ出版 pp.163-184
- Massumi, Brian（1995）“The Autonomy of Affect”, *Cultural Critique*, 31:83-109
- Massumi, Brian(2021)*Parables for the Virtual Movement, Affect, Sensation* Duke University Press Durham and London
- 中川理（2022）書評「西井・箭内辺『アフェクトゥス——生の外側に触れる』」『文化人類学』Vol.87-3 pp.516-518
- 西井涼子・箭内匡（2020）『アフェクトゥス——生の外側に触れる』京都大学学術出版会
- 岡原正幸（1998）『ホモ・アフェクトゥス——感情社会学的に自己表現する』世界思想社
- ストラザーン、マリリン（2015）『部分的つながり』大杉高司・浜田明範・田口陽子・丹羽充・里見龍樹訳 水声社
- スピノザ（2021a）『スピノザ エチカ 倫理学（上）』畠中尚志訳 岩波書店
- スピノザ（2021b）『スピノザ エティカ』工藤・斎藤訳 中央公論新社